２０２１年度　公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費　実績報告書

2022 年　4 月　30 日

北九州市立大学長　様

（所属・職名）青山学院大学法学部・教授
（氏名）　森裕亮

2021 年度に交付を受けた公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費に係る研究実績について、次の通り報告します。

研究課題名	コロナ禍と人口減少時代における地域づくりに向けた新たなモデルの開発:アニメ聖地巡礼から見る「関係人口」の活かし方					
	合計	使用内訳（単位：円）				
交付決定額	587260	備品費	消耗品費	報酬	その他	旅費交通費
執行額	451997	0	26790	0	363857	60760
執行残額	135263					
共同研究者	所属・職名		氏名		役割分担等	

研究分野：地方自治

キーワード：アニメ聖地巡礼、人口減少、地域づくり

研究成果の概要（和文）

近年全国各地で盛り上がるアニメ聖地巡礼に関する各地域の取り組みがコロナ禍においていかなる状況になっているのか、コロナ禍以前からの取り組みと今後の可能性について検討した。

2018 年以降からアニメ聖地巡礼を活用した地域づくりについては全国で積極的に展開されたが、コロナ禍で集客イベントが中止になるなど大きな影響を受けた。オンラインの手段を活用したものもあった。まだまだ各地域では、コロナ禍以降のあり方は模索中といったところだ。ただし、一方で、小規模な屋外イベントは影響を受けにくい状況はあり、とりわけファン参加型の清掃ボランティア事業は、一つの鍵を提供しているのではないかというのが今回の研究の最大の発見である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今回の研究成果は、コロナ禍で大規模集客イベントが非常に大きな影響を受けたことが明らかとなったが、逆にキャンプ場のイベントなど、屋外を基本とする小規模事業については結構可能ではないかと考えられた。特に、ファン参加の清掃ボランティアは大いに注目できる。当然のことながら、無理に清掃を参加者に求めることは意味のないことだが、ファンたちの思いがそこにあるなら、それは実施した方がいいだろう。

こうした聖地清掃はかねてから実施されてきたが、アニメ聖地巡礼研究はところどころで注目してきたものの、十分な質量の研究分析を行ってこなかった。今回の研究は、その不足の箇所に攻め込むことができた。特に、アニメ聖地巡礼は、基本はフィルムツーリズム（コンテンツツーリズム）の視点のみから照射されてきたが、実はエコツーリズムやボランティアツーリズムという観点に立つと、また別の興味深い点が見えるということも今回の研究の発見ではあった。

1. 研究の背景

アニメ聖地巡礼は、2010 年代以降、全国的に注目を集め始めた。推進組織としてアニメツーリズム協会も立ち上がり、「訪れてみたいアニメ聖地 88 箇所」のような事業も展開中である。なぜ着目されてきたかといえば、アニメの舞台モデルとなることで、誘客の契機とすることができるからだ。しかしそれを超えて、本研究が着眼していたのが、関係人口づくりとの接点だ。ファンたちは相当の訪問リピーターとなることがあり、地域の商店主などとの交流交信を積極的に行うということがわかっていた。さらには、アニメ舞台モデルとなったことをきっかけに訪問地を気に入り、移住してしまうという選択をするファンもいるほどだ。一種の地域コミュニティのメンバーシップを獲得する動機をファンが有しているような光景である。ここにこれからの地域づくりの新しい着想の発端があるように感じていた。

とはいえ、コロナ禍はそうしたアニメ聖地巡礼とそれを活用した地域の取り組み全体に甚大な影響をもたらしているのではないかとも思われた。緊急事態宣言や蔓延防止措置などを経て現地に足を運びにくくなったからである。これまでの歴史的展開はさることながら、今どのような工夫が行われ、そしていかなる可能性があるのかを検討したのが本研究である。

2. 研究の目的

アニメ聖地巡礼現象の特質を解明しながら、とりわけコロナ禍をへて、当該現象とそれを活用した地域の取り組みがいかに進められているか、影響を受けているのかいないのか、また今後の展開可能性について新たなアイデアと論点を得ることが目的である。

3. 研究の方法

研究方法としては、文献調査、インタビュー調査、そしてアンケート調査を実施した。文献調査は、これまでに刊行されたアニメ聖地巡礼に関する著書論文等を整理した。インタビュー調査は、オンラインで４人の関係者に実施した。アンケートは、全国自治体でアニメ聖地巡礼現象の形跡があったところに郵送調査を行った。

4. 研究成果

とりも直さず、この 1 年間の研究期間において最も成果として強調したいことは、小規模屋外の形式で、かつファンたちの想いに応えることができるイベント事情の可能性だ。確かに観光誘客事業として、ディジタルスタンプラリー、YouTube のイベント開催配信などオンラインを取り入れた工夫、また限定グッズ・コラボグッズの通年通信販売の実施など、訪問できないファンとの交信を継続する工夫を行なっていたことがわかった。加えて、かつてに比べてふるさと納税の活用も進んでいる。一方で、小規模な屋外イベントはそれほど影響を受けていない状況はあり、来訪者が大挙しないケースでは三密を避けながら、来訪者を迎える体制は継続できたようである。

その中で、本研究が着眼したのが「聖地清掃」である。実は、ファンが聖地清掃に取り組むケースがかなり昔から行われており（1990 年台初頭）、アンケート結果でもすでに終了した事業も含めて、15％程度の聖地（自治体）でファン参加の聖地清掃が行われていることがわかった。実際に、30 年ほど続けられている驚異的な活動として、「究極超人あ～る」に登場する JR 田切駅（長野県飯島町）の清掃を行う「田切ネットワーク」がまず指摘されるべきだ。また、「あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。」の舞台モデルである埼玉県秩父市や「ヤマノススメ」の舞台モデルである埼玉県飯能市、また「サクラクエスト」の舞台モデルである富山県南砺市などで、清掃活動また環境保全活動が継続されている。人数もそれほど多くなく、かつ屋外で三密を防ぐことができる事業である。しかも、ファンにとっては思いを馳せる大好きな場所に関わることができる貴重な機会である。興味深いのは、前出の田切ネットワークをはじめ、ファンたち自身がボランティアイベントを企画した事例もあるということだ。当然、全ての作品とその舞台モデルでこの種の取り組みが意味を持つわけではないから、清掃作業を一挙に一般化すべきだというつもりもない。強引な拡張や単純なモノマネは、失敗する。ただ、コロナ禍の感染対策を十分に行き届けさせつつ、ファンたちの想いに応えつつ、地域との関係を深めてもらうイベントとしてこのファン参加型清掃ボランティア事業の潜在性を一つの発見として本研究は強調したい。本研究は新しいコロナ禍以降のモデルを提示できたわけではないし、明示的な提案を結論とすることはできなかった。この点は本研究の限界だったと反省している。しかしながら、アニメ聖地巡礼を単なる観光現象だと捉えて分析したり、地域づくりを考えたりすることは若干限界をきたしているように思える。新しい見方を検討し、地域社会がアニメ聖地巡礼をどう捉えれば、それぞれの地域にどのような可能性があり得るか、そういった発想の転換に本研究が少しでも役立てば幸いである。

【研究成果物】

「「よそ者」のパワー：アニメ聖地巡礼現象に見る新たな地域づくりの可能性(第１回)よそ者と関係人口」『まち・むら：自治会町内会情報誌』（154）（2021 年）

「「よそ者」のパワー：アニメ聖地巡礼現象に見る新たな地域づくりの可能性(第２回)アニメ聖地巡礼とは」『まち・むら：自治会町内会情報誌』（155）（2021 年）

「「よそ者」のパワー：アニメ聖地巡礼現象に見る新たな地域づくりの可能性(第３回)ファンと地域とのアツい関係：新たなコミュニティの形」『まち・むら：自治会町内会情報誌』（156）（2021 年）

「「よそ者」のパワー：アニメ聖地巡礼現象に見る新たな地域づくりの可能性(第４回)新たなコミュニティ論の展望：新たなコミュニティの形」『まち・むら：自治会町内会情報誌』（157）（2022 年）

Mori H. The Power of Anime: A New Driver of Volunteer Tourism. *Tourism and Hospitality*. 2022; 3(2):330-344. https://doi.org/10.3390/tourhosp3020022